



291号  
2024/3

日中文化交流市民サークル'わんりい'  
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方  
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195  
<http://wanli-san.com/>  
Eメール:t\_taizan@yahoo.co.jp



田舎の珈琲屋：去年の正月は台湾南部へ。濁口溪を遡って着いたのは落多納部落。民族料理店や、穀物山菜店がありました。ランチをしていると突然日本人の青年が現れ、「日本人は珍しい」と近寄ってきました。普段は北京在住ですが、休みの時偶然ここに来て、気に入って時々来るようになったそうです。写真はランチの後で行った珈琲屋。屋号は「一山沫咖啡屋」。美味しいコーヒーでした。(2023年1月 台湾高雄市茂林区にて 佐々木健之)

‘わんりい’ 2024年3月号の目次は16ページにあります

qǐ sǐ huí shēng  
起 死 回 生

中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から

ういくす  
文と訳・有為楠君代

今月は、久し振りに日本でも使われる四字成語、起死回生です。

・>・>・>・>・>・>

ある時、扁鵲<sup>へんじやく</sup>が旅の途中で、ある小国を通ると、その国の人々は、国の太子が突然死んだ話でもちきりでした。医者としての興味が湧いて、扁鵲は、太子を生き返らせることが出来るかどうか、行って診てみようと思決めました。

扁鵲は太子を診断した後で言いました：「太子は、息はしていないが、気を失っているだけで、今ならお助けすることが出来るでしょう」と言い終わるとすぐ、扁鵲は太子の頭、胸、手、脚など数か所に針を打ちました。暫くすると、太子はゆっくりと息を吹き返したのです。

この話が伝わると、扁鵲の名声は高まり、人々は皆、彼は死人を医術で生き返らせた、起死回生の医術を持った医者だと褒めそやしました。

・>・>・>・>・>・>

**言葉の意味：**死人を復活させること：多くは医術或いは技術が高く、滅びそうな事物を救うことを形容する。

**使い方：**息も絶え絶えだった小魚は、餌を貰って食べるとすっかり元気になって死期を脱（起死回生）した。

・>・>・>・>・>・>

扁鵲は名医の代名詞として使われるほどの、伝説的な名医で、史記には「渤海郡鄭県の人、姓は秦、名は越人」と紹介されていますが、これには違う説も多く伝えられています。史記は、扁鵲の活動の初めは紀元前 655 年、活動の終わりは紀元前 350 年と伝えています。その間は 300 年以上、一人の人の寿命としては長すぎますが、司馬遷は当

時の人々が言い伝える話をそのまま収録したのでしょう。後世の研究で、何人かの名医の記憶が、一人の業績として伝わったと考えるのが妥当だと考えられているようです。

更に史記によれば、扁鵲は、長桑君（仙人？）という人物から医術を伝授され、与えられた薬を飲んで人体の臓器が透視できるようになりました。扁鵲は、透視が出来ることは内緒にし、脈を取って病人の様子を見ながら、針、湿布、投薬などで多くの人々を病から救いました。そして人々は、彼のことを「起死回生（死人をも蘇らせる）」の医者、として尊敬しました。以後、脈を取る医者は、扁鵲の弟子と目されました。



挿絵：満柏画伯

史記はこの他に、晋・昭公の時代、大夫の趙簡子が意識不明になった時、彼を診た扁鵲が、「彼は今、天帝と会っている、三日後には意識を取り戻す」と見立てて、三日後に意識を取り戻した趙簡子が、扁鵲の言葉通りのことを言ったという話；斉に行つて桓侯（戦国時代の覇者となった桓公とは別人）に面会した時、桓侯の身体に病の芽を見つけて治療を勧めたが、侯は、自分は健康だと言って聞き入れず、何回か面会し治療を勧めても断られるうちに、病がどんどん進み骨髓に入ってしまった、桓侯が発病し扁鵲に診て貰おうとした時には、「病が骨髓に入ったのではもう治療は出来ない」と言い残し、斉を出て行った後だったと言う話などが載っています。

扁鵲は、戦国時代に各国を巡り、各地で必要とされる医療を提供し、名医との評判がますます高くなると、秦の太医令・李醯<sup>りけい</sup>に医術を妬まれて暗殺されてしまいました。それが紀元前 350 年のことだったのです。



ぎよ ほ  
『漁父の歌』

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

『楚辞』と言えは思い起こすのは悲劇の憂国詩人屈原（前 343～前 278）のことです。楚の王家に繋がる名家の生まれで、楚の懐王から厚い信任を得ていました。時は戦国時代、日増しに強大化する秦の侵略から国を守るため、一方の強国であった齊と同盟を結んで秦に対抗する策を献じますが受け入れられず、逆に仲間の讒言にあつて国を追われ、その結果、楚は秦に敗れ、後には亡びてしまいます。生きる望みを失った屈原は汨羅江に身を投げて果てました。その時の無念の思いを楚の国特有の表現形式を用いて綴ったのが『楚辞』だと伝えられています。

その『楚辞』の中に「漁父」(ぎよ ほ ぎよ ふ)と題する一文があります。恐らく後世の人が記したものと思われませんが、実際の作者についてはよくわかっていません。

さてその屈原が死に場所を求めて、汨羅江のほとりを徘徊していた時、ひとりの漁師に出逢い、次のように語りかけます。「儂はこの国を守るために散々苦勞してきたが、国王をはじめ誰も儂の言葉に耳を傾ける者はいなかった。世の人はみんな酒に酔い、醒めているのは唯一、儂だけなんだよ。実に悲しいことだ」と。

すると漁師は次のように応えます。「聖人というものは物に拘らない、世の推移に応じて変わって

いくものじゃよ。皆の衆が酒に酔っているなら一緒に酔えばよい。お前さんだけひとりで賢ぶることなかろうに」。

こう言った後、次のような舟歌を歌いながら去って行きました。

yú fù gē  
漁父歌

cāng làng zhī shuǐ qīng xī  
沧浪之水清兮  
kě yǐ zhuó wú yīng  
可以濯吾纓  
cāng làng zhī shuǐ zhuó xī  
沧浪之水浊兮  
kě yǐ zhuó wú zú  
可以濯吾足

\* 沧浪之水=川の水。

\* 兮=リズムを取るための語気詞。

\* 纓=冠を結ぶ紐、冠は身分や位階を表わす大切なものだから清潔な水で浄めなければならないという意。

\* 吾足=自分の足。足はもともと自分のものなので、多少の汚れは我慢しろという意。

[訓読]

そうろう  
滄浪の水清ければ  
以て吾が纓を濯うべし  
滄浪の水濁れば  
以て我が足を濯うべし

[和訳]

川の流れが清ければ  
かむり  
冠の紐を洗うがよかる  
川の流れが濁るなら  
手前の足でも洗うがよかる

事の良し悪しは別として、今でも何処からか聞こえてきそうな歌の文句ですね。



屈原をしのんで行われる龍舟レース(湖南省嶽陽市)

中国サイト「馬蜂窩」より

## 4年ぶりの河南省

文と写真＝村上直樹

春節（2月10日）も無事過ぎて、龍年も本格的にスタートした。昨年（西暦2023年）末には国連の総会で春節が祝日として採択されたそうである。それにより春節には会議等の開催が避けられるようになるという。春節を年間最大の祝日とする中国、ベトナムなど12か国による共同の働きかけが実った。12か国とは他に、ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、モリシャス、フィリピン、韓国、シンガポール、タイが含まれる（2023年12月27日付『VIETJO』より）。あらためて、東アジアの中で、春節をとくに気にかけない今の日本は例外である。日本でも春節が祝日になれば、「わんりい」の新年会も毎年、春節当日に開催できるのに、と期待したい。

一方、中国では日本と違い、西暦の年末でも普段の日常と余り変わらず、友人・知人にも気兼ねなく会えそうなので（中国でも元旦は法定休日）、昨年12月22日から31日まで4年ぶりで河南省に出かけた。『わんりい』誌上で「雑感」執筆の機会をいただいたのが2020年4月なので、その後初めての現地体験でもあった。22日から27日は鄭州市内で宿泊し、28日と29日は現地の知人の案内で洛陽市郊外と済源市を巡り、30日に鄭州市内に戻って大晦日の夜帰国した。

22日（金）は、成田から上海で乗り継ぎ、夕刻、鄭州に到着して早々、ちょっとしたトラブルがあった。国際的な旅行サイト（プラットフォーム）を通じて予約したはずのホテルのフロントで、私の名前が見つからなかった。旅行サイトから届いた予約完了メールに間違ったホテル名が記載されていて、それをそのまま行先としてタクシーに見せ



商代の都の城壁跡(2023年12月撮影)

た（旅行者は通常そうする！）のが原因だった。実は、日本で出発前にホテルの場所を確かめようとしても、どうもはっきりせず、少し嫌な予感がしていたので却って慌てることもなかった。ほどなく同じ系列の別のホテルに予約されていることがわかり、無事、金水路に面した正しいホテルに辿り着いた。

1日置いて24日（日）にはホテル隣の「紫荊山公園」を南の方角へ探検に出かけた。この公園は19.73ヘクタールの広さ（「日比谷公園」の約1.2倍）に緑地、水辺等が広がる市民の憩いの場である。公園を抜けると土手のようなものが見えてきた（上の写真参照）。

これは紀元前1600年ごろに興った商（殷）代の都の跡であり、長さ約7キロメートルにわたる土製の城壁の一部である。とくにこの周辺は「鄭州商代都城内城東城垣遺跡」と呼ばれ、1,700メートルほどの長さで城壁が連続して保存されている。「東城垣遺跡博物館」という大きくはないが新しい近代的な建物があつたので入ってみることにした。本来、入館するにはスマホでQRコードを読

み込んで、身分証番号と中国の電話番号を登録する必要があるが、受付で外国人だと伝えるとパスポート番号を書き留めただけで入場可となった。この博物館は映像が主で、発掘された現物の展示は少なかった。なお、今回の旅行では数か所の大小さまざまな「博物館」に行ったが、いずれも係員が居る窓口もあり通常のシステムから外れても好意的に対応してくれた。また、どこも入館無料なのには感激した。

商代の都としての鄭州についてしっかり知りたければ、すぐ近くに「鄭州商都遺跡博物院」という巨大な博物館がある。今回、26日（火）に行ってみた。この博物館は2022年7月に開館したばかりである。先の城壁跡も含むこの周辺は全体として「鄭州商城国家考古遺跡公園」とされており、他にも関連の建築工事が進んでいる様子であった。

この博物館では発掘された青銅器、玉石等の展示を中心に、映像、パノラマ等、現代先進技術を駆使して3,600年前の商代の都を再現している。もちろん発掘調査は継続中であり展示の最後には「鄭州商代都城的未解之謎」がいくつか挙げられていた。たとえば、鄭州地区では今まで商代の王の墓が発見されていない。鄭州の商代都城（都）の王の墓地はどこにあるのか？ また別に、鄭州の商代都城はなぜ放棄されてしまったのか？ 都が安陽



「二七記念塔」(2023年12月撮影)

の殷墟に移った商代後期には鄭州の商代都城内における住居や活動とされる跡はない。ただ都城外に少数の住居跡があるだけである、といった内容である。見学者がそれぞれ「仮説」を考えるよう促す趣向であろう。

この日は、特別展として「奔流—魯迅博物館蔵黄河流域石刻拓片(拓本)展」が開催されており、文化遺産の保護・研究にも熱心であった魯迅が黄河の川岸で収集した石刻・拓本等が展示されていた(左下写真参照)。「魯迅と河南」というコーナーもあり、とくに1900年代初め河南省出身の留学生が日本で発行し、魯迅も寄稿していた雑誌『豫報』、『河南』も見ることができた。

話は24日に戻って、遺跡公園を鄭汴路に出たところにある鄭州文廟駅から地下鉄3号線に乗り二七広場駅まで行くことにした。現在の「二七広場」は商業施設の集まる地域であり、二七とは100年ほど前の1923年2月4日に始まり7日に悲劇を生んだ鉄道大ストライキ(罢工)を意味する(これについては2023年4月号の「雑感」にやや詳しく書いた)。今回、初めて「鄭州二七罢工記念塔」(鄭州二七記念館)の中に入って登った。各階にテーマ別の展示があり、記念品売り場もあったが「雑



「鄭州商都遺跡博物院」にて(2023年12月撮影)





「二七記念堂」(2023年12月撮影)

感」で紹介した記念はがきは置いてなかったほか、全体として百周年に関係する記念品は見当たらず、やや予想外だった。

記念塔を降りて、買い物客でごった返す徳化街を少し歩くと、「鄭州二七記念堂」はこちらという標識を見つけた。1923年2月1日に沿線各地の労働代表が鄭州に集まり、政府の軍警に行く手を阻まれつつもその入り口で「京漢鐵路总工会成立大会万歳！」と宣言した「普樂園」劇場のあった場所で、「二七大罷工」を記念するもう一つの建物である。早速入館して「雑感」執筆のためにした勉強の内容を実物等で確かめることができた。

誕生してまもない中国共産党の指導の下に反帝国主義・反封建主義を掲げて敢行されたこのストライキは残念ながら労働者側の敗北に終わってしまった。しかし、不屈の抵抗を見せた「二七精神」は学ぶべきものとして今に語り継がれている。この記念堂では河南省に関係する他の革命精神として「紅旗渠精神」、「大別山精神」、「焦裕禄精神」、「任長霞精神」が掲げられていた。とくに最後の任長霞とは河南省出身の女性警察官で、庶民とりわけ弱者を守るという立場からさまざまな事件の解決に貢献したが、惜しくも2004年に40歳の若さで自動車事故により殉職した人物である。没後、

その生涯は劇、映画、テレビドラマの題材としても取り上げられ、見習うべき鑑とされている。

記念館を出て、近くの「旺角美食城」というフードコートで「酸菜魚」(ご飯とスープ付)を食べ、二七広場駅から地下鉄で鄭州文廟駅へ戻る。まだ、陽も高かったので「鄭州文廟」を参観することにした。「文廟」とは孔子を記念する建築物で全国各地にある(「孔廟」とも言う)。現在の鄭州文廟は規模も小さく全国的に有名とは言えないが、その中心的建築物である「大成殿」は清代光緒24年(1898年)に再建されたもので「国家重点文物保护单位」に指定されている。

一旦、ホテルに戻って夕食のために出直し、「襄県馬記爛麵城」という小さなレストランを見つけて水餃子を注文した。普通の半分くらいの大きさではあったが37個で16元(約320円)。美味しかったので食べ切ることができた。

翌25日(月)はスマホの地図アプリを頼りに最寄りの「新華書店」へ行ってみた。ホテル前の金水路を西へ進み、「紫荊山公園」のはずれから花園路を北に行ったところにある。外観は新しくはないが、中はかなり広く本の並べ方も含めて綺麗にリフォームされていた。

『2024年農家曆』、『紅色中原』(2019年、大象出版社)等を買って求めた。後者は中国共産党の歴史と河南省の関連を項目ごとに短く紹介しており、便利そうである。たとえば「二七驚濤[惊涛]」(二七の荒波)、「鄭州二七記念堂、二七記念塔」といった項目が見える。書店を出てすぐ近くの小さなカレンダー専門店で購入。昼食は「桃娘・下飯小火鍋」というチェーン店で「麻辣鴨血豆腐鍋」(ご飯つき)を食べた(19元+3.8元)。一人前のコンロで少し贅沢な気分になった。

(つづく)

## 「秦皇島」から「承德」へ

### 「避暑山莊・外八廟」駆け足旅行(10)

文と写真 吉光 清

「外八廟」という名称が広く知られているが、実際は「八」に留まらないことは各位のご存知の通りで、世界文化遺産に登録されているのは「承德避暑山莊及其周囲寺廟」となっている。

12まで数えられる寺廟のうちの2つの寺は純然たる漢式の寺院であり、他と比べると時代が古い(「薄善寺」は現存しない)。それもその筈で、それらは避暑山莊を拓いた康熙帝の造営である。

6つの寺と4つの寺廟(「普陀宗乘之廟」と「須弥福寿之廟」を含む)はすべてにチベット式建築が取り入れられており、乾隆帝によって造営されたものである(ウイキペディア)。

特に、ラサのポタラ宮とシガツェのタシルンポ寺というチベット仏教の2大本山を模した両廟の建設は、乾隆帝がこの地をチベット仏教の聖地にしようとしたと考える方が自然であろう。

避暑山莊での政務とは、夏季期間の北京での政務の肩代わり以上に、その時期に満蒙諸民族を招集し、政治的な工作を行うことだったに違いない。北京が漢人を統治するための首都であったなら、承德は「万里の長城」の外の国々を統治するための首都であったとも言える。その首都をチベット仏教の聖地化することは、チベット仏教を精神的な支えとしている満蒙諸民族に対する精神的同化工作であった筈である。そこには信仰心以上の意図も読み取れよう。

承德が行宮である以上に、満蒙諸民族の国家を支配する中央政府であったことを意味しよう。清朝時代の掟として「いかなる資格の漢人でも、またいかなる重大な用件があっても、漢人が万里の長城以北には、一步たりとも足を踏み入れることが許されなかった」ことは、「万里の長城」が外からの侵入を防ぐ手立てであった筈が、「漢人が越えることの出来ない障壁」に変わってしまったという歴史の皮肉である。

#### ■「避暑山莊」の中へ入る

近道をしようとして、かえって時間をロスしてしまい、汗を掻き掻き、避暑山莊に入るチケット売り場



「避暑山莊」への門に掲げられた扁額

まで戻った。時刻は12時半を回り、そのためか行列は解消しており、145元を払って中に入った。

秦皇島の知人から言われていたことがあった。「山莊内を見学するには、先ず、園内を循環しているマイクロバスに乗って、高い場所を見物し、それから、池の方に下って来る方が良い」であった。

勧められた通り、門から中に入り左手方向に進むと乗り場はすぐ見付き、50元を支払い、乗り込んだ。他には2グループが乗っていた。バスが走り出しても途中から乗って来る人々もいて、どうやらチケットを買えば、何処で乗っても、何処で降りても自由という方式らしかった。

狭いながらも舗装してある山道を登るバスは対向車とすれ違うことは無く、どうやら一方通行になった。



城壁上の観光客と防護ネット



ているようだった。

避暑山荘をグルリと取り巻く城壁の下に到達した所で下車し、そのまま城壁上に出ると一気に展望が開けた。その辺りは避暑山荘の北側を見渡す格好の展望台になっていた。万里の長城を小型にした通路には家族連れも見受けられた。城壁の外側には転落防止のためか防護ネットが張られていた。

### ■指呼に望む二大寺廟

何も遮るものが無い百八十度の眺望は「此処に来て良かった」と思わせるものだった。

視野の中には、正面に「普陀宗乘之廟」、左側に「豫像寺」、そして右側に「須弥福寿之廟」があった。中でも、武烈河の支流の対岸に、対峙するように建つ「普陀宗乘之廟」の偉容が目をつけた。

山腹に沿わせてチベット式白台群を配置しているので、大紅台を中心にした巨大な建造物のようで、山全体が要塞のように見えた。山林の緑の中に琉璃瓦の黄色、大紅台の赤レンガ色、白台群の白色が鮮やかであった。

一方、「須弥福寿之廟」はさしたる傾斜地に建てられていないので、城壁上からの眺めは横方向から俯瞰するような形になった。

右手前から順に、「碑亭」「大紅台」「吉祥法喜殿」の赤レンガ色と、「碑亭」「妙高庄严殿」「吉祥法喜殿」「万法宗源殿」のそれぞれの黄色や金色の屋根瓦が美しい。左手の最奥部には「琉璃宝塔」が見えていた。

背後の山の向う側は東の方角になるが、高層住宅が林立して、承德市の郊外も急速に都市化が進んでいる様子が見て取れた。



横から俯瞰した「須弥福寿之廟」



お堂の中の祭壇と肖像画

### ■祀られていた「康熙帝」

城壁を降りて、庭園に向かうべく歩き始めたところ、小さなお堂のような建物に出会ったが、かつて存在した、大きな建物の遺跡かと思われた。中を覗くと、何の調度品も無く、祭壇と肖像画が飾られ、供え物が置かれているだけだった。「文治武功安邦定國」の文字からも、当然「乾隆帝」かと思ったが、いろいろな資料で見た「乾隆帝」とは少し顔が異なる気がした。後から、「避暑山荘」を拓いた功績者の「康熙帝」かと思い当たった。

「康熙帝」と言えば、清朝第4代の皇帝で「乾隆帝」の祖父にあたる。儉約に努め、国庫を豊かにし、自らも出征して幾多の勝利を収め、文化的にも大きな業績を残し、唐の太宗と並ぶ、中国歴代最高の名君とされている。8歳で即位したが、重臣4人による政権運営が続き、16歳の時によりやく親政を始めた。このことから、満州族伝統の「合議による皇帝決定」では皇位継承が不安定になり、皇帝が中国全土を統治するには不向きと考え、歴代中国王朝に倣って皇太子を定め、各皇子にも勢力を持たせて、皇族たちを牽制した。しかし、次の皇帝を巡る激しい抗争は止まず、九人の有力皇子が皇位を窺って暗闘を繰り返した「九子奪嫡」を引き起こした。

筆者はそれを題材にした2017年制作の華流ドラマ「花散る宮廷の女たち～愛と裏切りの生涯～（原題：花落宮廷錯流年）」をBS放送で視聴し、その劇的な展開に驚き、哀切さも極まった。（つづく）

#### ●資料：

『多田等観全文集－チベット仏教と文化－』、多田等観著、今枝由郎監修・編集、白水社、2007。



# 村岡花子とNHK (1)

和田 宏

## 〈村岡花子とは〉

村岡花子 (1893～1968 享年 75) は、カナダ人のルーシー・モード・モンゴメリーの書いた『赤毛のアン』や、アメリカ人のマーク・トウェインの書いた『王子と乞食』などの翻訳者として知られるが、ほかにも評論家、随筆家、児童文学者として幅広く活躍した女性です。

市川房枝と一緒に婦人参政権獲得運動に協力したり、戦後は、基督教文筆家協会 (現・日本クリスチャン・ペンクラブ) の初代会長も務めたりし、1960 年藍綬褒章を受章しました。

## 〈編集者になり、結婚して村岡姓に〉

クリスチャンで社会主義者だった父親・逸平の意向で、2 歳で幼児洗礼を受け、1903 年 10 歳の時、麻布鳥居坂にあるカナダ系メソジスト派の東洋英和女学校に給費生として編入学し、10 年間の寄宿生活でカナダ人婦人宣教師ブラックモーア校長から徹底した英語教育を受けました。

熱心なクリスチャンとなり、優れた英語力、進取の気性が彼女の生涯の礎となりました。

1914 年、20 歳で東洋英和女学校の高等科 3 年を卒業し、姉妹校である山梨英和女学校の英語教師を務めました。5 年後の 1919 年、銀座 4 丁目にあるキリスト教関係の出版社 (「教文館」の前身) に婦女子向けの雑誌の編集者として就職。この出版社の隣に社屋を構えていた「福音印刷」の銀座支社長で、妻帯者の村岡徹三と道ならぬ恋に陥り、徹三が先妻と離婚後、出会って半年後の 1919 年 10 月に 26 歳で結婚し、安中から村岡姓に変わりました。

花子は、救世軍の山室軍平から頼まれて、『モーセが修学せし國』を翻訳し、それを「福音印刷」で印刷して本が刊行される迄、徹三と何度かの打ち合わせを通して、心を通わせて行ったのです。

花子は、日本基督教団の大森めぐみ教会に所属し、教会に通いました。日本基督教団の出版した讚美歌集の 7 番『主のみいつとみさかえとを』と、277 番

『わがたまをいつくしみて』の英語の歌詞を邦訳しています。

二人の間には、一人っ子の道雄が誕生しましたが、疫痢のため 5 歳で失い、後に、花子の妹・梅子の長女・みどりを養女として迎えました。みどりの次女・村岡恵理が、祖母にあたる花子の伝記『アンのゆりかご～村岡花子の生涯～』を 2008 年に著し、この本が、2014 年度上半期に放送された NHK の朝の連続テレビ小説『花子とアン』の原案となりました。

花子は、歌人の柳原白蓮 (本名：輝子) と東洋英和女学校でクラスメートになり、二人は互いに“腹心の友”と呼び合う生涯の親友となりました。白蓮は、1934 (昭和 9) 年に短歌会『ことたま』を創始した人です。白蓮が 1967 年亡くなったあと、娘の宮崎落萼さんが、『ことたま』を引き継ぎました。私は、この『ことたま』の会員でした。落萼さんは、宮崎滔天の孫です。

滔天と言えば、1911 年、清朝を打倒した辛亥革命の指導者・孫文や黄興らを、自らの財産を投げ打って支援した九州男児です。落萼さんは短歌会を主宰すると同時に、日中交流の民間組織『滔天会』も主宰しました。

## 〈ラジオ放送『こどもの新聞』を担当〉

花子は、戦前の 1932 年から 1941 年までの足掛け 10 年間、JOAK (NHK の前身) 嘱託となり、ラジオ放送でその日に起きたニュースを子供向けに、判り易く話す番組『こどもの新聞』を担当し、そのまろやかな美声で人気を博しました。

NHK 社会部で私の後輩だった池上彰が、1994 年から 11 年間、TV 番組『週刊こどもニュース』の「お父さん役」を担当して有名になりましたが、花子は、言ってみれば、戦前の『こどもニュース』の「おばさん役」だったのです。花子は毎回、このラジオ番組の最初に、“全国のおちいさい皆さん、ごきげんよう”、最後には、“では皆さん、ごきげんよう、さようなら”と言ったのです。



NHK ラジオに初めて登場した時の村岡花子  
(1932年6月1日)『文春写真館』より

この挨拶は、花子を通った東洋英和女学校の生徒達の挨拶言葉でした。語尾にアクセントを置く抑揚が独特で、NHKの朝ドラ『花子とアン』で、ナレーション役を務めた美輪明宏も、これを真似て言ったのです。私も、メールの最後に“ご機嫌よう・・・！”を使わせて貰っています(笑)。

#### 〈「横浜訓盲学院」で講話〉

花子が、1940年12月のある日、アメリカ人宣教師から招きを受けて、横浜市中区にある「横浜訓盲学院」という盲人学校のクリスマス会に出掛けて行って講話をした際のエピソードです。

「横浜訓盲学院」は、現在もあります。クリスマス会のプログラムには歌や詩の暗唱や寸劇などがありました。11歳くらいの子が、「クリスマスの季節になると花の色は一層美しく、空の青色はいよいよ濃く、人の心に愛が一層深くなるように私には思われる」と言う英詩を暗唱しました。この詩を聴いていた花子は、目の見えない子どもに色が判るのだろうかと思いましたが、司会の先生から、「ラジオのおばさんですよ！村岡のおばさんがお見えになりましたよ！」と紹介され、いよいよ花子さんの登壇です。大勢の子ども達が一斉に、「わー！」と、大歓声を上げ、笑いが弾けました。訓盲学院の子ども達にも、ラジオ番組を通じて花子の名前や声は親しまれていました。盲目の子供たちの無数の視線とニコニコ顔を前にして、教壇横に並んで居た先生達と講堂の後ろに詰めていた父母達は、思わず涙したと伝えられています。“永遠の不具”の子どもは笑い、“五体満足”の大人が泣いた訳です。花子は、暫く声が出ま

せんでしたが、目の見えない子ども達が、こんなにも朗らかで泣かないのに自分が泣くのは失礼だと、自らを叱ってグッとこらえ、笑顔を取り戻して話を始めたのでした。

#### 〈赤毛のアン〉

出版社「教文館」時代の同僚、カナダ人の宣教師ミス・ロレッタ・ショーが、世界情勢が悪化したため、1939年に帰国することになり、花子に託したのが、モンゴメリー作の『Anne of Green Gables』のボロボロになった原書本でした。花子は、“敵性国家”の英語で書かれた本を大切に隠し持ち、空襲警報による灯火管制の下、こつこつ翻訳し続けました。お陰で戦争のいまわしさを忘れることが出来たと回想しています。

戦後の1952年になって、『Anne of Green Gables』を、『赤毛のアン』という題名にして漸く出版にこぎつけました。直訳すれば、『緑の切り妻屋根のアン』となりますが、『窓に倚る少女』という題名にしようとしたところ、青山学院大学英文学科の学生になっていた娘のみどりが、“『窓に倚る少女』なんて、おかしいよ。『赤毛のアン』の方が断然いいわ”と言ったことから、『赤毛のアン』と言う題名に決まったのです。以後、1959年まで7年にわたり、アン・シリーズ10冊を翻訳出版しました。

アン・シリーズには、シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」、「ハムレット」、「十二夜」、「オセロ」、「お気に召すまま」、「ジュリアス・シーザー」などからの引用がみられます。読者は、知らず知らずのうちにシェイクスピアの素晴らしい言葉にも触れることが出来る訳です。 つづく



グリーンゲイブルズ(カナダのプリンスエドワード島にある  
モンゴメリーの親族の家)——Google——





# “甲辰”とは？

後藤 芳昭

## 1. 「甲辰」これを、何と読むか？

答えは、「きのえ たつ」です。そもそも、「甲」を「きのえ」と呼ぶのはなぜか？ と言うと、その答えは、以下のとおりです。

甲は、甲から始まる「十干（1：甲、2：乙、3：丙、4：丁、5：戊、6：巳、7：庚、8：辛、9：壬、10：癸）」の一つで1番目であるが、広辞苑によれば、中国古来の五行説（この世を構成するのは木、火、土、金、水の五要素とする思想）から、十干の1番目は「木」の意で、え＝兄（陽：陰陽説では奇数は陽、偶数は陰）だから、「きのえ」となる。

そして、「甲乙」は木の兄弟、「丙丁」は火の兄弟、「戊巳」は土の兄弟、「庚辛」は金の兄弟、「壬癸」は水の兄弟と考えた。従って、十干の2番目「乙」は、偶数なので「きの と（と＝弟）」、3番目の「丙」は火の兄で「ひのえ」、4番目の「丁」は「ひのと」、続く「戊」、「巳」は「つちのえ」と「つちのと」、「庚」、「辛」は「かのえ」と「かのと」、「壬」、「癸」は「みずのえ」と「みずのと」となって。これで「十干」の呼び名について、長年の疑問が解消しました。

次に“辰”です。これは読めます。我々にも馴染みのあるものです。「1：子」、「2：丑」、「3：寅」、「4：卯」、「5：辰」、「6：巳」、「7：午」、「8：未」、「9：申」、「10：酉」、「11：戌」、「12：亥」で、ご存知の十二支です。「辰」は、五番目でたつ」なのです。

## 2. 「干支」のルール

「干」は十干の「干」、「支」は十二支の「支」。十干は「天干」、十二支は「地支」とされ、中国では農曆として、その組み合わせで年、月、日、時を記します。

その組み合わせにはルールがあります。天干の奇数（1番目の甲、3番目の丙、5番目の戊等）は陽で、地支の奇数（1番目の子、3番目の寅、5番目の辰等）の陽としか組めない。天干の偶数（2番目の乙、4番目の丁、6番目の己等）は陰で地支の偶数（2番目の丑、4番目の卯等）の陰としか組めないのです。

このルールは、非常に科学的に合理的であると説明しています（『农历与民俗文化』张冰隅著、上海教

育出版社）が、僕にはよく分かりません。とにかく、そういうルールな訳です。

## 3. 今年の干支は？ 来年はどうなる？

今年の干支は、（甲の前で）10番目の「癸」と、地支は（5番目の「辰」の前で）4番目の「卯（偶数の陰）」で（みずのと [う]）だったわけです。

来年は、天干は2番目の「乙（きのと）」と、地支は6番目の「巳（偶数の陰）」なので、即ち、乙巳（きのと [み]）となります。

これで長年、不可解だった干支による農曆年号標記の仕掛けが解け、「天干は10、地支は12なのに、なぜ60の組み合わせしかできないか？」について納得（陰陽で半分になるから）しました。

干支の始まり「甲子」から、最後の「癸亥」までで60通り、それで、60年で一巡り（還暦）です。

中国では、これを総称して、「六十甲子」または、簡単に「花甲」といいます。「花甲」は60才という意味は知っていましたが、その由来はここにあった訳です。

## 4. まとめ

干支による日にちの表記は、中国では3～4千年の歴史があります。甲骨文字あるいはそれ以前の伝承からも窺えるそうです。

また、所謂、十干の文字は、中国の古代人が最も目出度く、縁起が良いもので順序良く、ゆっくりと成長し発展するものと認識したそうです。例えば、「甲」は固い殻を突き破り突出すること、草木が陰である大地から芽吹き出すようである、よって、「甲」を天干の首とした。

それとともに、十二支の文字は、美しさが多い意味を持つものとしたとのこと。例えば、「辰」は万物が震動し伸長するとした。「甲辰」の年は、物事が新しく立ち上がり、大きく激動・成長する年の意味と思われる。また、干支は月、日、時にも使われますが、今回は年について考えてみました。

最後に、干支の60通りの循環表を添え、各位の参考とさせていただきます。

干支の循環表 (今年 2024 年は[41]の「甲辰(きのえたつ)」です)

1. 甲子 (きのえ ね)	2. 乙丑 (きのと うし)	3. 丙寅 (ひのえ とら)	4. 丁卯 (ひのと う)	5. 戊辰 (つちの えたつ)	6. 己巳 (つちの とみ)	7. 庚午 (かのえ うま)	8. 辛未 (かのと ひつじ)	9. 壬申 (みずの えさる)	10. 癸酉 (みずの ととり)
11. 甲戌 (きのえ いぬ)	12. 乙亥 (きのと い)	13. 丙子 (ひのえ ね)	14. 丁丑 (ひのと うし)	15. 戊寅 (つちの えとら)	16. 己卯 (つちの とう)	17. 庚辰 (かのえ たつ)	18. 辛巳 (かのと み)	19. 壬午 (みずの えうま)	20. 癸未 (みずの とひつ じ)
21. 甲申 (きのえ さる)	22. 乙酉 (きのと とり)	23. 丙戌 (ひのえ いぬ)	24. 丁亥 (ひのと い)	25. 戊子 (つちの えね)	26. 己丑 (つちの とうし)	27. 庚寅 (かのえ とら)	28. 辛卯 (かのと う)	29. 壬辰 (みずの えたつ)	30. 癸巳 (みずの とみ)
31. 甲午 (きのえ うま)	32. 乙未 (きのと ひつじ)	33. 丙申 (ひのえ さる)	34. 丁酉 (ひのと とり)	35. 戊戌 (つちの えいぬ)	36. 己亥 (つちの とい)	37. 庚子 (かのえ ね)	38. 辛丑 (かのと うし)	39. 壬寅 (みずの えとら)	40. 癸卯 (みずの とう)
41. 甲辰 (きのえ たつ)	42. 乙巳 (きのと み)	43. 丙午 (ひのえ うま)	44. 丁未 (ひのと ひつじ)	45. 戊申 (つちの えさる)	46. 己酉 (つちの ととり)	47. 庚戌 (かのえ いぬ)	48. 辛亥 (かのと い)	49. 壬子 (みずの えね)	50. 癸丑 (みずの とうし)
51. 甲寅 (きのえ とら)	52. 乙卯 (きのと う)	53. 丙辰 (ひのえ たつ)	54. 丁巳 (ひのと み)	55. 戊午 (つちの えうま)	56. 己未 (つちの とひつ じ)	57. 庚申 (かのえ さる)	58. 辛酉 (かのと とり)	59. 壬戌 (みずの といぬ)	60. 癸亥 (みずの とい)

十干十二支の話 (M.T.記)

十干十二支の歴史は古く、中国・殷の時代には既に暦日を表すのに用いられていたようです。殷王朝の研究が著しく進んだのは、1899年に大量に発見された甲骨片からですが、その甲骨片にはひび割れた文字らしきものが記され、後の研究で王が占いに使用した結果を記したものと判明しましたが、そこには干支を使った日付が記されていたので、殷王朝の研究が一気に進んだそうです。そして、年代もかなり正確に分かるのだそうです。中国の人々は、殷の時代から記録が行き届いていたのですね。

十干は日にちにも使われ、一通りの10日を旬と言ったようです。今でも月の上旬・中旬・下旬と言って、日本でも普通に使っていますね。こんなところでも、中国との関係の深さを知らされます。

ところで、十干はどう読みのでしょうか？ 日本語読みは、後藤さんが教えてくださいましたが、音ではどうよむのでしょうか。ここでご一緒に読んでみましょう。

甲(こう)・乙(おつ/いつ)・丙(へい)・丁(てい)・戊(ぼ)・己(き)・庚(こう)・辛(しん)・壬(じん)・癸(き)となります。序でに十二支の

ほうも音読みしてみましょう。子(し)・丑(ちゅう)・寅(いん)・卯(ぼう)・辰(しん)・巳(し)・午(ご)・未(び)・申(しん)・酉(ゆう)・戌(じゅつ)・亥(がい)となります。

中国では殷商の時代から毎年干支が割り当てられ、日本もそれに倣って日本独自の呼び方も出来ました(上記表参照)が、大きな出来事は、その年の干支で呼びならわしています。例えば、

- ①壬申の乱：672年に起こった、日本の古代史上最大の内戦。皇位継承の争い。
- ②戊辰戦争：1868年明治維新に伴い、明治政府軍と旧幕府軍との戦争で、日本の近代史上最大の内戦と言われる。
- ③庚午農民戦争：1894年、李氏朝鮮下の農民の反乱。日清戦争の火種となる。
- ④辛亥革命：1911年、清王朝が倒れ、中華民国が成立した。孫文が中華民国臨時大總統に就任。
- ⑤甲子園球場の建設：1924年に完成した。正式名称は「阪神甲子園球場」。

書道や水墨画などに干支と署名を書き加えることは今でも行われていますね。



すっかり海外旅行にも縁遠くなっていたが、此処まで頑張った（ワクチンを接種しながら）自分への褒美として、1月下旬に成田から出掛けた。

主たる目的地はネパールの首都カトマンズ、“わんりい”に連載中の記事で、チベット仏教について触れたことで、仏教とヒンドゥー教が混然と信仰されている様子が見たくなったのだった。しかし、チベット行きはハードルが高いため、「住んでいる人より多い神々が祀られている」カトマンズを訪れる少人数ツアーに申し込んだのだった。

沢木耕太郎の『深夜特急』は愛読書の一つである。ロンドンを目指しながら、東南アジアーインドー中央アジアを乗合バスで旅行をする話（紀行文ではなく、旅の体験を再構成した物語）で、遭遇した出来事、出会った人々、その経過や結末に対する素直な驚きと感動、そこから出て来た思索が瑞々しく描かれ、折に触れて読み返して来た。

その中で、カトマンズにも立ち寄っている。ヨーロッパ方面から流れ着いたヒッピーの若者たちが、暮らし易さゆえに長期滞在しているが、長旅に疲れ、目的を失い、ハシシに溺れ、脱け出す気力も失い、命を落としてゆく様子を見つめていた。

この著者もまた、連日の雨また雨の中、冷え冷えとしたカトマンズから出られず、彼らと同じ道を辿るのではないかという恐怖に襲われる。安宿のベッドに横たわっていると、夢と現の間で朦朧としてきて、もうどうなっても構わないという気持ちになってしまう。そんな彼を救い出してくれたのは、ある夕方の、雨上がりの（雨季の終わりを

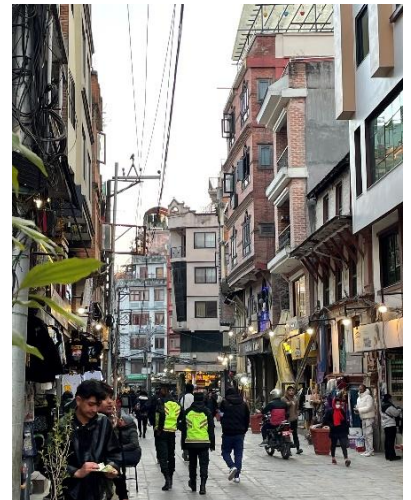


大樹の根元にも祀られている神々

告げる）見事な夕焼けだった。その夜のうちに支度を済ませ、快晴になった、翌早朝に旅

を再開できたのだった。

そうした話を読んで、カトマンズには少なからず、暗いイメージを持っていたのだが、今回の旅行を通じて印象がだいぶ違ったものになった。9月後半からは乾季



かつてのヒッピー向け安宿街

が続いているため、雨が降らずカラカラで、乾いた空気と砂埃のせいで、木々の緑は色褪せており、遠くの風景は霞んでいた。気温は東京より暖かく過ごし易かった。人々は忙しそうに行き交っていたが、「ナマステ」と挨拶すると、親しみを込めて挨拶を返してくれた。

旧市街のあちこちに色々な神が祀られており、人々の暮らしが垣間見える、狭く舗装されていない小路をバイクが騒々しく走り抜けていた。

旧王宮とその前にあるダルバール広場（世界遺産）、周辺の仏教寺院やヒンドゥー寺院を観光した。そうした場所では多くの鳩、犬、猿が居て「わが物顔」に振舞っていた。決して、死の街ではなく、混沌としながら人々に活気があった。広場近くの、かつてヒッピー向けの安宿が集まっていた通りも、今は明るい雰囲気になっていた。

今回のツアーの目玉は、ヒマラヤ山脈を一望し、運が良ければエベレストの姿が見られる遊覧飛行であった。前日の夜は、“明日もどうか晴れてくれ！、雲が出ないでくれ！”と祈った（何に？）。

当日は暗いうちからカトマンズ空港に移動し、周囲の展望が利くようになってから離陸し、絶好のタイミングで雲海の向こうに聳えるエベレストを見ることができた。大きな満足を感じて、リフレッシュできた旅行だった。

## みんなの広場

### 子曰、徳不孤 必有邻（子曰く、徳は孤ならず必ず隣あり）に思うこと

後藤 芳昭

論語にある孔子の言葉です。

徳の心があれば、必ずや協力者が現れると僕は解釈します。

しかしこれを「人を導く最強の教え易経」（日本実業出版社）の著者小椋浩一氏は

「陰の力の意義を示している。陽だけに頼れば孤独になりがちである。陰であれば育てている対象と常に一緒。孤独に悩むリーダーは自らの陰の力を改めて意識すると良い」と説いています。つまりリーダーは、徳、隣を一つのものとして自ら実践せよと。

これを機会に、関連する論語本を探し調べましたが、その見解を取るものはありませんでした。むしろ、次の解説文が最も得心がいくものでした。

「孔子は、乱れた世の中で道德の理想を貫くことは、一見孤立無援のたたかいのようだが、もともと普遍的なものである道德には必ず同行者、理解者つまり友があるという確信を表明したのである。」（桑原武夫集9 論語 P 102 岩波書店）

小椋氏は、易経の研究家で次世代リーダーの育成のため、その価値を勧める活動をしています。その志に異議を唱える気は毛頭ないのですが、孔子の引用文の解説を間違えていないだろうか？と思います。

桑原氏はさらに、この言葉は「儒教に独特の健康なオプチミズムがここにはっきりとあらわれている。『隣』という具体的な人間関係を示す言葉が用いられていることも、この章を力強くしている。」と解説しています。

令和6年の新年を迎え、孔子のこの言葉は、私たちに生きる弾みを与えてくれます。

### ■満柏画伯の講演会・柳子谷一族展のご案内

柳子谷は近代中国で大きな足跡を残した巨匠。令嬢・柳咏絮も著名な画家で、独自の画風を開いた。わんりいで挿絵や俳句をお願いする満柏画伯は柳咏絮女史の子息。柳家一族には芸術家が多い。

東京中国文化センターでは柳父娘の作品を中心とした一族の作品展を開催する。

#### 柳子谷・柳咏絮 家族画展と満柏画伯の講演

●期間：3月18日(月)～3月22日(金)

(20日は休館)

●時間：10時～18時 最終日は13時まで

●場所：東京中国文化センター

港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F

●無料講座（日本語） 講師：満柏

★講演 3月19日(火) 14:00～

「美・芸術とは何か」

★中国水墨画入門 3月21日(木) 14:00～

### ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

我と来て遊べや

親のない雀

小林一茶

xiǎo má què

小麻雀

lái yóu xì

来游戏

kuài kuài gào sù wǒ

快快告诉我

mā mā zài nǎ lǐ

妈妈在哪里



☆4年ぶりの新年会、参加者の感想と写真で再現！  
わんりいの新年会に参加して 福島鳳琳

2月4日わんりいの新年会にはじめて参加いたしました。北京の名物料理「涮羊肉（シュワンヤンロウ）」を本場の味で食べられて、北京出身の私がびっくりしました。テーブルの上に中国本場の調味料芝麻酱（白ごまみそ）、韭菜花（ニラの花の漬物）、酱豆腐（豆腐を発酵させてから塩に漬けたもの）が並んでいるのを見て、「涮羊肉の伝統的な食べ方を知っている人はだれ？」と思わず叫びました。上記の三つの調味料は涮羊肉を食べるときのゴマだれにもっとも欠かせない基本的なものなのです。食べてみると羊肉も臭みがなく、やわらかくて、とても美味しかったです。本当に懐かしい味でした。私と主人が北京に帰るたびに、必ず食べる料理です。

ちなみに、日本料理として定着している「しゃぶしゃぶ」ですが、その起源も北京名物の涮羊肉（シュワンヤンロウ）です。第2次世界大戦中（昭和20年頃）鳥取市出身で民芸運動の指導者であった吉田璋也氏が、戦時中に軍医として赴任していた北京で食べた涮羊肉を日本に伝えたと言われています。入手困難な羊肉を牛肉に替え再現したと言われています。

新年会で感動したのは涮羊肉だけではなく、参加者と会話を交わしたり、フルートで日中の名曲

を吹いたり、中国語の歌を歌ったりして、まるで故郷に帰って、家族といるような温かいアットホームな雰囲気でした。本当にわんりいとの出会いに感謝します。来年もまた会いましょう。



四川省の花を訪ねた旅行の紹介をする河本さん



涮羊肉のたれの作成は男性陣の仕事



大量の野菜の下準備



余興には本格的なシャンソンの歌声



澄んだフルートの音に聞き惚れる

## 【わんりいの催し】

### ♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：3月12日（火）10：00～11：30  
4月23日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

### \*\*\* 中国語で読む 漢詩の会 \*\*\*

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：3月31日（日）10：00～11：30  
4月28日（日）10：00～11：30
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）  
Email:ukiuki65jpp@yaho.co.jp  
(有為楠)



#### ■ 3月4月定例会 代表宅

- ▼ 3月14日（木）13：45～
- ▼ 4月4日（木）13：45～

#### ■ ‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼ 4月号 3月30日
- ▼ 5月号 未定

## ☆☆ 編集後記 ☆☆

わんりいは2月号がお休みだったせいか、1月2月の進みが速く、もう3月がやって来ることには驚いています。

2024年は思いがけず大きな災害に見舞われ、能登地方の方々は、お正月の団欒から一転、奈落の底に突き落とされました。そんなところへ容赦の無い寒さや雪が襲うのを、私たちはハラハラしながら、少しでも追い打ちの被害が軽くなるようにと祈るばかりでした。2月に入ると、記録的な気温の乱高下にも悩まされました。それでも、梅も、菜の花も、桜も、異常な高温に時期を早めながらも、美しく咲いて、春の訪れを告げてくれています。被災された方も、災厄を乗り越えて、生活の再建を図ろうと努力しておられます。人間を含めた動物も植物も、厳しい自然に逞しく立ち向かっています。40億年にもおよぶ生命の継続の力でしょう。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし  
郵便局振替口座:00180-5-134011 わんりい 10月以降の入会は、当年度会費1000円  
■ 問合せ：044-986-4195（寺西）

## ‘わんりい’ 291号の主な目次

寺子屋 四字成語(70)『起死回生』……………	2
「日译诗词」(38)「漁父の歌」……………	3
「中原雑感」(39) 4年ぶりの河南省……………	4
「避暑山荘・外八廟」 駆け足旅行 (10) ……	7
村岡花子とNHK (1) ……	9
「甲辰」とは? ……	11
「カトマンズは今日も晴だった」……………	13
みんなの広場……………	14
‘わんりい’の催し・お知らせ……………	16